

三十組之記
地

草木香 時鳥香
鳥合香 鶯香
三昧香 宇治香
四季歌集 四節香
山路香 五色香

多 9
1338
25





三十組之內地

草木香

宇治香

時鳥香

四季歌合香

鳥合香

四節香

鶯香

山路香

三躰香

五色香

香五種

草木香



一

二色、湛、試

二

右同以

三

右同以

四〜

右同

五〜

右同

右最初、小香の〜 灰右へ五包
つ分、一方つ〜 交合て一方より
一包取、又一方より一包〜 取て

右灰へ五包つ入移り、扱右の方五
包、其後、乱数の内へ入扱残りたる灰の
〜 五包と、お交焼出り、依去五包の角へ
何番目〜 同香とす、草 木の名
〜 書付出り、皆別〜 抄ハ其名目と

書付出な事 小香 同系や鳥の名
と草木 類の 草木の名
たの

^{二二} けいん
^{三四} いす

^{二二} けい
^{四五} くれ

^{二三} けい

^{二四} けい

^{二五} けい

^{二四} あき

^{三五} あき

^{二五} あき

皆別

かき

橘記の表

草木香記

すれ

二一五三三

名

口の

名

すれ

月日

土香名衆

記録是ノ順

時鳥香

香五種

一 一 一

二包德内一包試

二 一 一

右同外

三 一 一

二包德内一包試

有明〜

右同

月〜

右同

右試紙〜一二三の六包お交一包後
五包と柱出を記紙に書付る又有明
月の二包〜四包お交二包後〜少記

糸に書付る

始五種の内〜三番の二種出ると少
南に少の下〜き〜書又後の
香二柱も同香〜少に有明〜書別香
〜お〜の月〜書付る又時々の文字の

うなり書部 有明月の文字ハ
假名と書部と又記録題号ハ
文字と書部 点の文字とハ文字
ハほういの調子 記録の中は書部
尚記の表と能く可考又記と云ふ

有明と云ふ時に出香の下ハ歌と云
なりとも月と云ふ双い出ると記
録の裏ハ書部の香ハ片なり 試
み故より三の香と種とも出兩種も
尚記ハ二点と云ふ中はハゆきと云ふ

書本香 一種出る時南とい 一柱も
 何々まぐさ書分 又改正の分
 始五種の内より二三の續と少時下
 二二三の續と書分 なる外香高
 も二三の續と書分 なる外香高

時鳥香之記

二一三一二

右明
右明

右明

月

名

二一三一二月

りまぐさ 五

名

一三二一二 有明

四

不々まぐさ書分 なる外香高

月日

出香名乗

右式記録是ハ順王命 改正記左の

一

時多香之記

石明

月

二一三三三

名

二一三三三

石明 月 一

石明 月 一

月日

出香

名衆

新改正の記録是ハ順王命

石明 月 一

石明 月 一

石明 月 一

鳥合香

香四種

百千香 二包 湯内一包試

縮員香 右同所

呼子香 右同所

客

一包、徳紙

右試破りて出香四包打交二包の少
試合名乗紙書付少き南に点撃
たし、百千と稲負とあし記紙
よ いふち の紙書付出ま外是

又客の香二包して少式とあ
其時二種も客少き事と有とあし
時立よりいつても用ひる紙記乃
表へ能く可考なり

鳥合香之記

ウ

百子香

稀厚香

平子香

ウ

名

名

ウ

ウ

一

叶

月日

出香名乗

記録是ノ順事ノ又時立ノて追記

一種ノ少事ノ有ル合所要ノ

鸛香

香四種

松

四包、認内一包試

竹

右同以

梅

右同以

常々一

一包に試

右試法は先始に松竹梅一包つゝ三包
を少々扱ひ六包は常々一包を入
七包一丁を包一柱間為半記を
常々出さしまきりて残を少々扱ひ

丸香煙一丁すゝく但一種用の時

又近代梅の試をすべし一丁松竹の試

又松竹二包つゝ梅一包加へず妙四包と常々を入す

すゝ松竹梅三包を少々残六包は常々を

入すをす止し家一丁目所の

と

市々々々 谷々々 竹々々

梅々々 古果

松記の表々々々々可考たのう

常香記

梅松竹梅梅松々 谷の戸

名 梅竹梅梅々々 古果 五

名 梅松竹松松松々 谷の戸 全

月 日

出書 名果

記錄是下順多字 但今一少耳
當時不用故畧之

三躰香

香三種

春復々々

四包上徳内一包試

秋冬々々

右同以

悪旅々々

二包徳子試

右試香しやうのしやう出香ハ包お交まじりて試し合名衆紙しやうし書付しやう出し二種一名しやう一しやう花の名目しやう書付しやう出香ハ見合みあふしやう名目花のしやう

春はる夏なつ秋あき冬ふゆ

婦めかけ大おほ成なり身み

秋あき冬ふゆ

細こ小こ新あらた

春はる夏なつ

大おほ成なり身み

春はる夏なつ秋あき冬ふゆ

常とこ世よのこころ用もち

秋あき冬ふゆ春はる夏なつ

大おほ成なり身み

春はる夏なつ秋あき冬ふゆ

大おほ成なり身み

香粧春其の

のし衣

秋の香粧の

のし衣

香粧秋冬の

のし衣

二種香の二柱のし衣も札を

名乗紙のし衣のし衣のし衣

二種香のし衣のし衣のし衣

一衣のし衣のし衣のし衣

三種の歌のし衣

大馬頭最系親定

香粧のし衣のし衣のし衣

月につくおの 春の夜

藤原良経公

秋の夜も秋の夜も

あめ玉ちる床のきりぎりす

大徳寺長閑園

人さきぬ涙をうたぬ衣と

夢見るもやとてしる

大寺將後家

衣盛ふも乃衣をうたて

うしろ白妙乃天の香久山

藤原家隆

旅路する夢路のやうな山

閑ふきくちしる人なり

沙弥寂蓮

夏の夜乃有明の空をわくま

月よりあふ夜更の（夢）

鴨 長明

さしさひや残るる海をゆき

旅をふくすなと朝の如き

右歌七首の一句つとを取て名目とす

よのゝ 行記の表より終へ 准知

争 記 大の

春夏 —

秋冬 —

三 躰 香 記

夏 躰

春夏 夏 躰 秋冬 春夏
秋冬 秋冬 夏 躰

名 大 躰 山 大 躰 夏 躰 三 躰

名 大 躰 山 大 躰 夏 躰 四

月 日

出 香 名 衆

記 詠 是 順 争 全 の 人 の 三 躰 書

争

香四種

宇治香

櫻

三包後用一包試

紅葉

右同以

萱

右同以

白くく

二色混交紙

右試験く本番と二種く結合折交柱
出き二柱開くく少結紙如左

櫻紅葉四色ハ折交二色く結合 黄二色
結合 白二色結合ハく四結八種と少く

試合札折交 丸二柱少く札一枚く
折交ハ折紙二種少く一ツ出まし
記録ハ南斗くく少く不南ハ不書
去りく本番と先く少く名ハの札ハ
折交試合札文字別ハ少く如左

札表

檣板 樵か 終角 早歎 東屋
忘本 浮船 精吟 〆〆 夏浮橋

札裏

霞 紅葉 櫻 白 雪 萱

札打板たのこ

桜くすい

桜の花おき

おきふくすい

おきふの花おき

桜葉くすい

夜の花おき

紅葉くすい

雪の花おき

萱くすい

萱の花おき

白くすい

白の花おき

如二種目くすい札打板四枚おき

跡に二枚と残る其外記録の表と
可考 記録の

中 治香丸
紅葉 白
白 薑 薑 白

紅葉 白 薑 薑

橋姫 霞 白 四

推本 霞 音 白 薑 全

月日 出香 名衆

記録 是より

香四種

四季歌合香

一

四色德内一包試

二

右同所

三

右同所

答として

三包恩式

先給の記紙の内は春夏秋冬の文字を

書お交て採題して出

但記帛二枚で
書き一枚紙を至

取取て給の季と座と定め名來の

服と給の季と記する

本式に記紙は四季の
歌一首づき書き置て

之で一組として縦に春夏秋冬

分る所春夏或人秋冬之人多く

の所は春夏秋冬といふ程も書け

是より又春夏秋冬とも書け
たりある所は分るものなり

右試

終りて出番十二包如たむい合

一一と一結 二二と一結 三三と一結
ウウと一結

右一の結 春と名附 二と夏 三と秋
ウと冬と名附 結い多し 打交 四結
八種と少し 残一二三ウと 春夏秋冬

一と四季 打交 少 扱 少 扱 初八種 終り
二包 一と 春夏秋冬と 記 糸 書附 四種
の内より 我 香 何 番 目 有と 少 多
は 四種の内より 我 季の 香と 記 糸
書附 出 我 香 面 有と 点 有と 面 外

すてし点年皆南とい下中辰は歌一首
書年一始八種の内より我季の香
南り後四種の時不南又一方は始や南
派ある二人の中は持書一方は南
一方は不南は南りの方より持書又我季

の片南り方人の始るは上の句後あるは
下の句とすの中辰は書年よりきりくたの

し

後四種の内より我季の香南り
始の南りも二点抵り後の一点は
二色りある双方より四点ありたとい
四ッ部

四季歌合香

一
二
三
ウ

一三ウニ
ニウ三一

春名

春秋冬夏

四勝

春の内に全

夏名

春夏秋冬

二

二

秋名

春夏秋冬

一持

四

冬名

春夏秋冬

二

四

月日

出香名

又探題

の時より節上生る順

は春夏秋冬と定むれ探題より及自然

貴人連生の時より別る心得あり

四季の歌大の

春は歌

咲ちもなほ春のうらを
せめて花を今しちや

夏歌

あきふ乃ほを色の時津を
なるとりく南をふく

秋歌

ワきくみみ来もあき、秋来ぬ
老の秋を今しちや

冬歌

秋の色を今しちや

ありし花ちきりきり
れきりきりきりきり
書きし花ちきりきり

四序香

香九種

初撮

五包、袋内一包試

橋

右同

有明

太同

峯香

右同

外香

五包 濃但各別香

と紀多 其名目

一と紫上 二と花散里 三と妹好

中宮 四と明石と 五と原氏とす

右試香 二種 了たの 結

合下

初極

橋

有

峯香

初極紫上

橋花散里

有明中宮

奉書明石上

右のしく組合並結多し打交柱出以
試は合名系紙に書付扱跡四種に當り
試有香あり右四包打交内より一包取
是は原氏と入て打交終出より少定

て何は原氏交りなり少ハ左の名目
合て名系紙に書付出右名系紙に
あれこれ少し本法多し二柱開
き多し左初は出香後は札と讀
紫上より皆試せられも初極より始

四條の香いづれも試みぬ初極く少
るゝ時此条の上組合ある事外
是は順も中一法の四種も試の覚え
原氏一柱の試み初の少く同心得
知る事 札お極たの事

初極く少く

初極のれお

橋く少く

橋のれお

有明く少く

有明のれお

峯は少く

峯のれお

初極紫く少く

若草のれお

橋花散里と云

時と云

有明中宮と云

月と云

峯雪明上と云

雪と云

初橋原氏と云

紫上と云

橋原氏と云

花散里と云

有明原氏と云

中宮と云

峯雪原氏と云

明石と云

右原氏の組合も始といふと原氏と云ふ

中々結い合ふ事札の表裏の事

裏の名目と書行記の表と云ふ可考

記灰のこ

初極

紫上

橋

花散室

秋好中宮

有明

明至

峰雪

原氏

四節香之記

初極

橋

有明

初極

峰雪

有明

峰雪

有明

初極

花散

有明

紫上

峰雪

中宮

明至

原氏

小秋

初極

時

有明

若草

峰雪

月雪

橋

中宮

全

白氣

有明若草

月雪

橋

中宮

十二

紅楓

時

有明

若草

峰雪

月雪

橋

十四

月日

出香

名衆

記録は順まへ古式の少書有といふ
南時不用今は式も用ひ

香三種

山路香

霞々下

十三包、袋内一包試

霧々下

右同以

山路々下

右同以

右最初、出香三拾六包を、夜方山路
くく三包つ十二は合る、灰の各同の通し紙
今くは尋紙の上より名所の山繻紙あり
む試番の十二包の内始三く一包つ
今叔少極の先三十六包と右五紙

く取州、お交又三包つ入並此より
一包つ、五粒出よりむ試、元初より少
試は合札より七名、尋紙より少
山繻紙繻紙より灰より

春日山

吉野山

龍田山

伊駒山

小倉山

嵐山

暗部山

音羽山

相坂山

富士山

足柄山

常盤山

此組香を札より少時一炷開く初

等尤なり斗書付不南へふ書分

但香数多き人札一袋より中中へ

返りなり又此組香の香包数多し人

長益のせて一包つて炷出に候師傳

と文句又札の表の山路に塚有りと

書なり然も文字のうらゝい亦有

依て近代のころより用ひ裏紙
震方山路の文字各四枚づ一人前
十二枚十人ある或拾枚より片右札とい
一な〜事むつき、故南時名乗紙
よして添間の方よりきりむ一柱間

北時の南り斗書付く不南の不書と云ふ
但其式より点ふ入点ふ式も云々
記録の事

山路香之記

山路

香

之

記

臺 翦 金 春 暗 伊 窮 鼠 足 音 小 倉 吉 當 盤
旁 辰 路 旁 辰 辰 辰 路 旁 路 落 山 溪

名
哥
夜
路
哥
夜
夜
路
哥
路
路
路
路
路
亥

名
音
辰
辰
辰
辰
洛
音
房
辰
路
九

月日
出香
名衆

子順先生

香六種

五色香

青々下

二包、器内一包試

黄々下

右同以

赤々下

右同以

白くして

右同以

黒くして

右同以

紫くして

五色を試す

右試香終りて残り五包の止香、紫一包
加へ六包くして打交す之の中終りて名衆

紙に書附出に記録する未の所を案と
書案の場を明とす各種も南と北紫
の字は二点横は一間按心の紫の
朱と太集ふくふ字を寄て紙所へ
六種とも南と北の全の人を五色と書へ

行記の面々能く可考なり

五色香之記

青
黄
赤
白
黒
紫

白青赤紫黄黒

名 白青紫黄黒 五色

此香の品名

名 白青紫黄 黒 四

月日 出香 名衆

記録は順に又右赤系西種

其高は案の文字は二点掛と云ふ

先回を通り又赤斗南は系ふ高ハ

同字の右の方二点の座より一点掛る紫斗
南より赤と青の左の方傍点の座より点掛
争う右立色の試包の五色紙より包上より
文字より立色の座より知ると本香
の紫紙より包む争うより故には紫の香

紫紙は包之一同は本香と紫紙包と紙
と紙 又白紙と紙畧式の時の上は
文字書紙を試紙の上のりて本香包
常式のとく角くは書紙



